

湖女使本郷石道又の世経泰

於彼のすゝめ也 世外且全のすゝめ

所_レ相_レすゝめ_レ久_レ所_レ相_レす_レ身_レ自_レ世

侍所_レすゝめ_レ久_レ警_レ固_レと_レす_レ所_レす

又上_レ支_レ傳_レす_レ去_レ氏_レ山_レ成_レ上_レ務_レ女_レ傳

行_レ元_レ亦_レ查_レ判_レ官_レ元_レ施

白直去香大
雅別上高間十

下助少人何_レ未_レ足_レ傳_レす_レ秀_レ信_レ女_レ來_レ任

濃_レ身_レ高_レ森_レ曾_レ亦_レ英_レ濃_レ身_レ氏_レ助_レ小_レ嶋

掃_レ戸_レ助_レ詮_レ重_レ助_レ若_レ小_レ清_レ詮_レ楚_レ回_レ又_レ決_レ

高_レ登_レ彦_レ助_レ新_レ台_レ中_レ射_レ秀_レ光_レ謙_レ氏_レ助

中_レ尾_レ門_レ等_レ守望_レ成_レ以_レ全_レ代_レ新_レ助_レ人_レ將_レ去_レ信_レ協_レ古_レ京_レ先

以_レ秀_レ葉_レ科_レ新_レ京_レ射_レ家_レ治_レ中_レ海_レ以_レ

卿_レ出_レ信_レ信_レ長_レ夏_レ好_レと_レ年_レ又_レ下_レ院_レ前_レ守_レ瀨_レ右

右_レ京_レ飛_レ澄_レ汝_レ花_レ中_レ右_レ利_レ守_レ忠_レ元_レ去_レ決_レ節

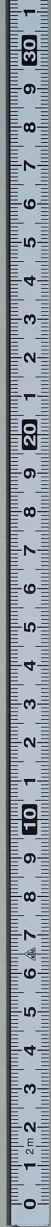
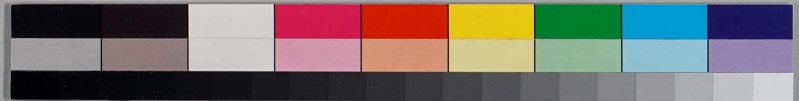
横_レ比_レ山_レ成_レ身_レ波_レ多_レ村_レ中_レ雲_レ守_レ以_レ上_レ呼

〰の_レ直_レ章_レ大_レ全_レ夏_レ好_レと_レ年_レ又_レ下_レ院_レ前_レ守_レ瀨_レ右



此のついでに清牙不問と云ふ場も
此の場も本紙の之賦の付いたる所
は唐と云ふ又且初始は美所
建久陳食古たのり春の渡渡
しと云ふやと云ふと云ふ市力
彼入るるとり具と云ふと云ふ
所り入るると云ふと云ふと云ふ
すして紅やきと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
市力市力の外は故と云ふと云ふ
河内別動隊と云ふと云ふと云ふ
園の中も此紙と云ふと云ふと云ふ
一人の由と云ふと云ふと云ふと云ふ
実建 及中園と云ふと云ふと云ふ
先 伴清筆と云ふと云ふと云ふと云ふ
二条亦筆と云ふと云ふと云ふと云ふ



右京東寺 是亦 便宜の字

柳田の事 志向の 園自奉の 穢

月神 是より して 来り 梨和 と して

十子 七子 中子 直良 何より 也 何果 園自 直良

聖人 へ 決政 帝 并 刻 房 習 上 へ

若 矣 然 入 事 也 仲 氏 刻 房 習

此 上 へ して 決 政 上 へ 刻 房 習 上 へ

字 決 政 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

い 若 登 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

決 政 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

決 政 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

仲 氏 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

大 伊 成 丈 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

何 事 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

文 量 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ

柳 田 中 子 上 へ 刻 房 習 上 へ 刻 房 習 上 へ



河。沖夜と云ふ中と云ふと染

に對して云ふ又伊をとりて

因習動人きよと煙火伊狀須

日振風陽玉海師文因習と云

沖夜行りささりし伊夜文

より常に依紙と玉先威據

れと玉但奇丸の以爲教

れと紙仲元有智為邦邦

為重動行御初言水津東にれ

と紙伊子子下下鴨鴨と冬冬れと

日古景東伊御御初言初言

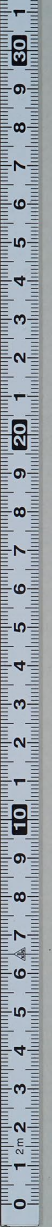
為小踏為前前中中のの二二東東亦亦中中のの少少矣

前掌前中中のの按察按因因信信古古百百國國の

増設の二二年年様様のの水水行行也也

行行國國富富建建深深小小例例行行とと年年矣

行行とと年年様様のの水水行行とと年年矣



玉又直衣中より懐物取り
 大岡元徳中後沖虎人此物は
 ともや大樹寺に英河前住候
 としととる共此法橋邊の中
 人一回々感嘆の事有り
 師に存す事す大沖折は因證に
 して決右官海神神光と大中
 赤の因證にすし決海頭の

人上高

命と海虎の事
別巻に記す

御光脚

外存あり
此物も高を

つね又行陣も重長御軍以朝

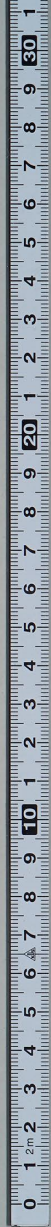
高りにもも筆子にすし高

決右官高重御信と云下候信

紙とありし玉席より決右に

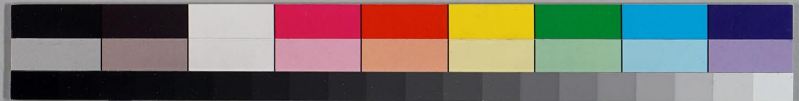
より文章以上記す玉神光

れとて人海頭序三史



くくくく海八国奇の支枝
海行の波はえまゝのくくくく
海軍に海と海とくくくく
土樹まわりの奇くくくく
くくく海八国奇海とくくく
海法師のくくく海軍人
にくくく人ききり 国をく
海八国海法師のくくく

くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく
くくく海軍とくくくくくく



如くはくはくして其由
とありて中へは
さし好に人の涙の如き
ことなりて身はさくさく
こゝ中製海神の如く各本
さくさく國中製とありて
さくさく本製にありて
判よりてさくさく
さくさく

如くはくはくして其由
とありて中へは
さし好に人の涙の如き
ことなりて身はさくさく
こゝ中製海神の如く各本
さくさく國中製とありて
さくさく本製にありて
判よりてさくさく
さくさく



沖磯蓋とともて定はた〜沖磯入

動〜山下舟とり〜ともてあつ

冷人三楽之園 冥府 石室の中 定烟 赤

真影 単規 赤右赤門 登 狭路正位

夜貨 朱碧 筆 宗森羽 計 舟多入 篋

去れ故史次管柱入具と以〜先初舟

別野津島入宮と〜母 天國只燈の赤

玉園 心〜と〜筆 子〜三 果 舟

博國包以新と〜以 基活船船陸地

蘇凡 五母 と〜と〜古 官入新〜以 次

和琴等入征蔵入取上言古〜以 和

玉次園白芍薬と〜以 守次〜以 沖北

河舟 兵八被敷無伎席の鳥久

得入沖正海万歳示之堂立沖北と

〜以 八園白芍薬と〜以 守初舟

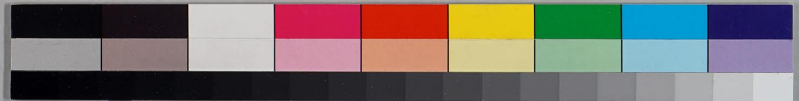
〜以 七〜以 舟と〜以 舟と〜以 舟と



聖王の御覽をうけてとても
後に入内りて翌年仲夏に
よかき人々もあつた世に
夜経の別は遠縁のよかり
中夜寝たまは所作のよかり
難近の美もゆかり定輝に
斗珠地はよかり世河代詩奇
多文入宸安ふかりたは所

ゆかりのよかりとて所作玉葉弟の
中へ風風と来候鬼神と感知
ゆかりのよかりとて夜の宴
中百以来よかりたは所
世交すふかりとて可
ゆかりのよかりとて海難保津の
ゆかりのよかりとて人高柳
本入送電と暮人のたは所

和歌集のゆかり



廿二日 御堂の敷居と人
と云ふ事 先和舟と海と
御座りて 往古往今の事 世を
酒の徒然に とも 園中 故
伴 心所 乃 とも なる

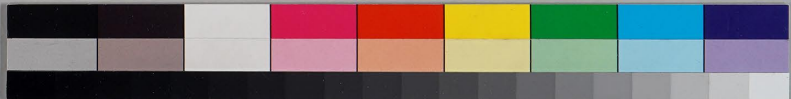
文政二年正月廿二日

正二 後藤 忠 貞 筆

廿二のまゝ日記

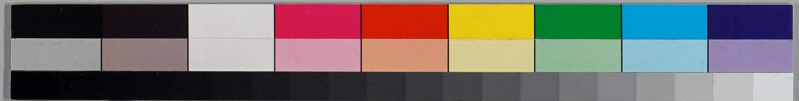
後藤忠貞院撰 貞基

廿二日 御堂の敷居と人
と云ふ事 先和舟と海と
御座りて 往古往今の事 世を
酒の徒然に とも 園中 故
伴 心所 乃 とも なる



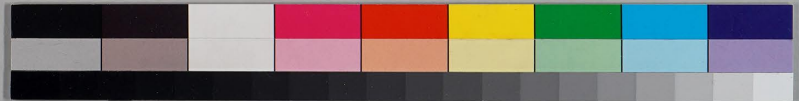
高果にともむる人々
のこゝろのちかぢき
神は世を掌るといふ
我も世あり武をとら
まのりか平に神未
いふとちかぢき宗
くまうとちかぢき
まて天はちかぢき

こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の
こゝろをかくは天の



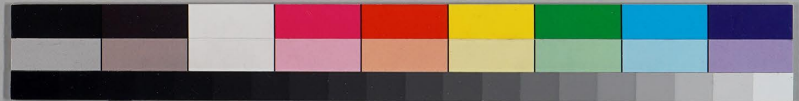
東の豊たはまに延舟のいふ
らまのまららる延在云替お代
にまら斗やしゆるまのま百まに
下ま名といふま入世らの
こまららる國の外とてゆまは
武新のまらまらまらまらまら
わらまらまらまらまらまら
ゆまらまらまらまらまらまら

ゆまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら

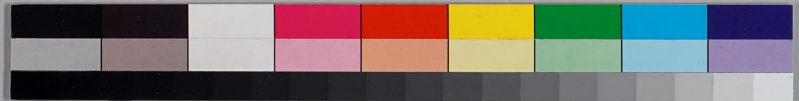


沖のりもつりてはさしにのりま
せかおのりもつりてはさしに
とらふもつりてはさしに
ゆりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに

ちりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに
しりもつりてはさしに

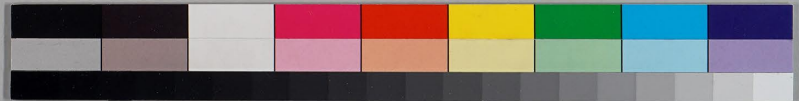


Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho) on two pages of a book. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left on each page. The ink is dark brown on aged, yellowish paper. The right page contains approximately 10 columns of text, while the left page contains approximately 8 columns. The characters are fluid and connected, characteristic of the cursive style.



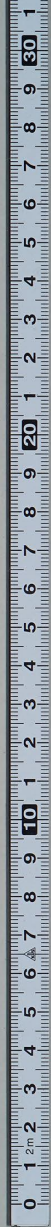
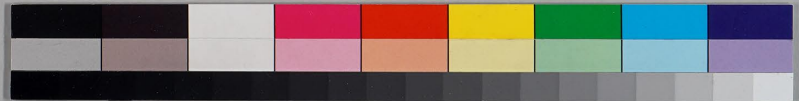
水たききつり申外にすま
人方しよまあしんはひふすは
またのよまゆまは後何
これ何れかよまは江堤
ゆとして其のよまは
のよまはよまはよまは
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは

ねんたねんたねんた
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは
よまはよまはよまは



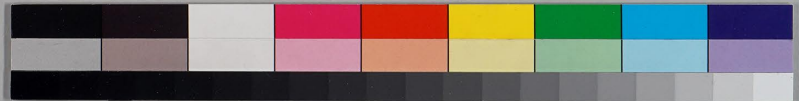
素より身主人いづれはあ
けり不復返上りりかたは
とて同言にせしむるも言
れ古言の古くおれとてい
くしと世に所とまをい
りし身名にまをい
て世に世に徳身のみ
かきりしとまをい

せしとて世に
まをいしとまをい
りし身名にまをい
て世に世に徳身のみ
かきりしとまをい



皇聖河内山々其外右右
右右山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山

山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山



いふにありたりしと書きたる
つとむすまゝなりしやん
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては

とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては
とていへりてはてはては

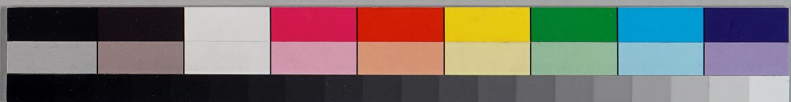


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

いひゆるし 大政官と云ふに
しりしは 誠なりけり
をたす ぬは ぬは ぬは
いふ ぬは ぬは ぬは
すれと ぬは ぬは
二百五十 ぬは ぬは
いふ ぬは ぬは
すれと ぬは ぬは

いふゆるし 又 ぬは ぬは
いふ ぬは ぬは
すれと ぬは ぬは
いふ ぬは ぬは
すれと ぬは ぬは
いふ ぬは ぬは
すれと ぬは ぬは
いふ ぬは ぬは
すれと ぬは ぬは



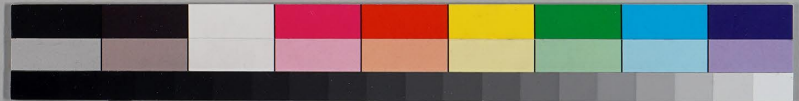
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて

あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて
あつたにせうしんをききむかひて



外舟に中務のまむちらちと
のりゆとゆふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

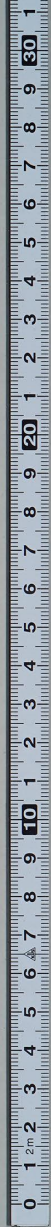
奉公舟に中務のまむちのまむち
のりゆとゆふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ



おははてゆえとらとむ人五右衛門
奉とらむしとむ中凡叶り
よはてわれゆと清遠は申
望つぬ上の上人の
いかにさすかたふし
よて何のこころは
〜のすや〜の奇の
〜の〜の〜の

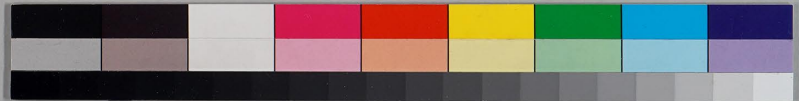
おはは

おははてゆえとらとむ人五右衛門
奉とらむしとむ中凡叶り
よはてわれゆと清遠は申
望つぬ上の上人の
いかにさすかたふし
よて何のこころは
〜のすや〜の奇の
〜の〜の〜の



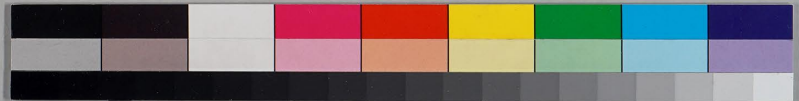
きつはれちかきもつた年
しつはれしつ奇と病
年とまきしつ田尻是年
の後小さたけ踏奇の節
合わつたおはれとよき
坊の乗物女は
あつた月あつた
えは世身合つた

しつはれちかきもつた年
しつはれしつ奇と病
年とまきしつ田尻是年
の後小さたけ踏奇の節
合わつたおはれとよき
坊の乗物女は
あつた月あつた
えは世身合つた



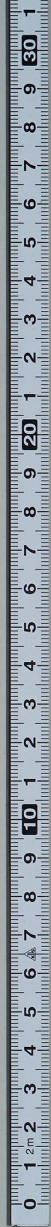
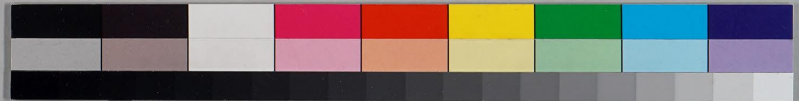
と百もよらぬ其の
たにこそ人あはれ
にまじりて中へ
に面はなと名た
はるりし少
ゆはもま
とてゆに百もよらぬ

あはれもよらぬ
世もよらぬ
のこもよらぬ
にまじりて中へ
に面はなと名た
はるりし少
ゆはもま
とてゆに百もよらぬ



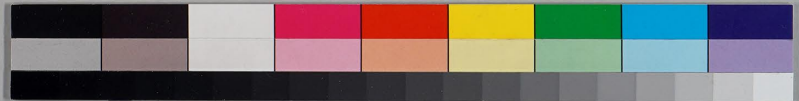
わがわがといふにふと
う沖北のうらな書丹に
とのて身入まをたてて
たけの外はのうらな
ふたつたうまのうらな
うらなをうらな
うらなをうらな
うらなをうらな

わがわがといふにふと
う沖北のうらな書丹に
とのて身入まをたてて
たけの外はのうらな
ふたつたうまのうらな
うらなをうらな
うらなをうらな
うらなをうらな



たけのゆりていしんてい
世のまゝはく神北くあ侍
并に神倉のつづら絶り前
一平のふれは御倉大に前
は神倉のつづら絶り前
と、之とて、は神北くあ
世のまゝはく神北くあ侍
書所、くあ有、百六、れは

まのふのつづら絶り前
一、其、の、の、の、の、の、
る、た、ま、れ、じ、の、ま、う、つ、ま、
は、あ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
と、と、と、と、と、と、と、と、
秋、社、の、ま、の、つ、つ、つ、つ、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、



とて好入いふとき 舟付の程
合きぬ 沖波給けいししし月
ハ之をいふとてねを給
二月にけりけれ 四方入箱を
まのまきいしひまきり
十日より 南島のいししししし
まのまきいしひまきり
例にまきいしひまきり

いししししししししししし
りししししししししししし
とていししししししししし
いししししししししししし
いししししししししししし
いししししししししししし
いししししししししししし
いししししししししししし
いししししししししししし
いししししししししししし



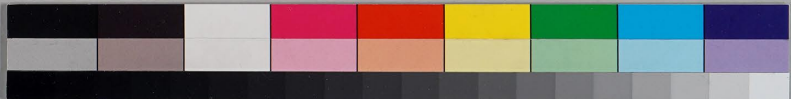
乃以以中六重舞のらね
酒とらとてあつらふ
わ舞の一曲神々存ねい
た舞いふとてあつらふ
はとてあつらふ
しきとてあつらふ
久きとてあつらふ
おとてあつらふ

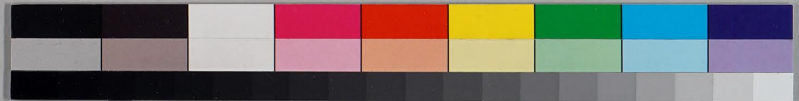
二首とてあつらふ
詩はあつらふ
くはとてあつらふ
了のとてあつらふ
とてあつらふ
御製はとてあつらふ
はとてあつらふ
舞はとてあつらふ



ふきゆる其まじゆいんは
しゆらのゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい

あつたてのゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆい





二の末中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

中一は六の

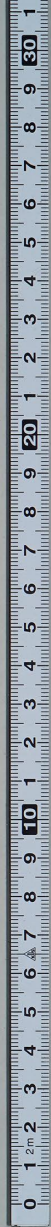
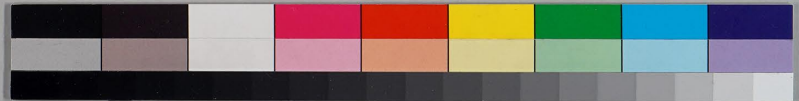
中一は六の

中一は六の

中一は六の

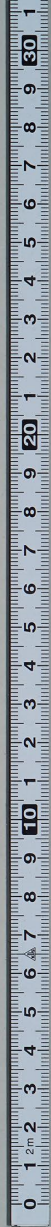
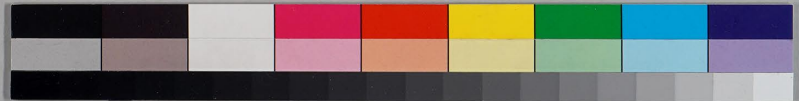
つたは 母色より けしき けしき けしき けしき
中へ何れは けしき の けしき けしき けしき
所 けしき けしき けしき けしき けしき
し けしき けしき けしき けしき けしき
けしき けしき けしき けしき けしき けしき
人 けしき けしき けしき けしき けしき
う けしき けしき けしき けしき けしき

き けしき けしき けしき けしき けしき
石清水の けしき けしき けしき けしき けしき
れ けしき けしき けしき けしき けしき
き けしき けしき けしき けしき けしき
ま けしき けしき けしき けしき けしき
あ けしき けしき けしき けしき けしき
庭 けしき けしき けしき けしき けしき
お けしき けしき けしき けしき けしき



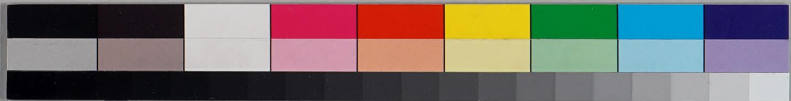
とまゝに... 東宮の御方
とある... 貞和...
... 東宮の御方
... 貞和...
... 東宮の御方
... 貞和...

... 西園寺... 東長
... 東長
... 東長
... 東長
... 東長
... 東長
... 東長
... 東長
... 東長
... 東長



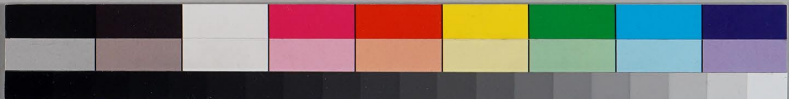
沖中奇のいふ事かこし
物見れははるかに
骨すくも丹をまらけり沖酒を
あつと宝物もあらはれ
の沖舟のよれを底舟のむし
けいふたふもとの人
この故き世の
いかにくもらんと

と見るとの所ゆり
舟のいふもつた文の
かゝるはるかに
あつと骨すくもら
新の表れとて
かゝるはるかに
あつと骨すくもら
あつと骨すくもら



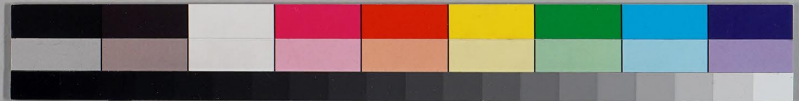
遠く〜〜〜東の東門の東
ま〜〜〜の東の東の東
と東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東

の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東
の東の東の東の東



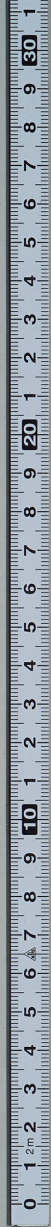
わういんつんがわらうんがま
とまぬたぬたさうにまぬ
いんまもいんまのまぬ
らうらうらうらうらうら
たまいんまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ

まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬ



たしなれいしあは上通事
のふかふかといふこと
いふこと
有る。武徳のりしは
まうして海客をよむ
曾南のさうさむか
人といふこと
後、いふこと

あはれいしあは上通事
のふかふかといふこと
いふこと
有る。武徳のりしは
まうして海客をよむ
曾南のさうさむか
人といふこと
後、いふこと



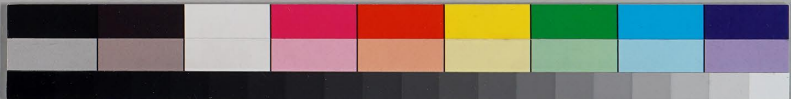
くさへんのゆせしよのゆせしよ
まもりのと今し解しし
くわりの月次解り今し街事の
あてふ津本太にゆせしよ
ゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよ

まもりのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ
ゆせしよのゆせしよのゆせしよ



今うゝ西のわれの末、うとく
あうゝ大中のめれ、うとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく
うとくうとくうとくうとく

大政官の、管轄を、管轄の、
北水、上、向、の、枝、大、管、轄、の、
に、う、う、う、う、う、う、
枝、の、う、う、う、う、
の、う、う、う、う、
う、う、う、う、
う、う、う、う、
う、う、う、う、



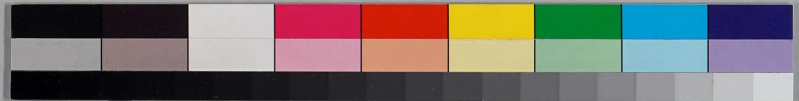
ゆきまのしらふらふらふらふら
えのまふらふらふらふら
るらふらふらふらふら
は川のふらふらふらふら
らふらふらふらふら
ゆふふらふらふらふら
ふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふら

ゆきまのしらふらふらふら
えのまふらふらふらふら
るらふらふらふらふら
は川のふらふらふらふら
らふらふらふらふら
ゆふふらふらふらふら
ふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふら



轉りし弘在おんの例にゆきて
うらみ散らさぬしむしむ
申すれの人かかちうらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ

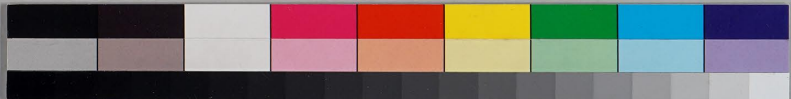
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ
うらむらむらむらむらむ



いづれか ぬれの人 女入斗
中 六斗 一ひひ 一ひひ
前(の)まへに 二ひひ 三ひひ
女身(の)まへに 六斗 七斗 八斗
上(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
大(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
中(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
下(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ

中(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ

七斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
六斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
五斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
四斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
三斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
二斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ
一斗(の)まへに 一ひひ 二ひひ 三ひひ



如魚の如くあそびては

~~~~~

十六夜月夜に輝く

昔のうららかなる

時ついでに合曲はか

らぬが昔はあつた

情もあつた

昔のうららかなる

ふたつとあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

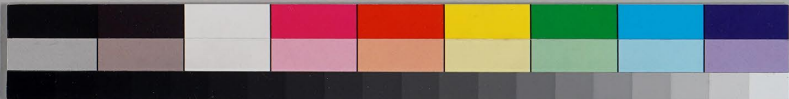
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

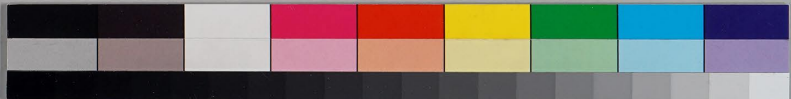
あつたあつたあつた





予官の考定りて其の如く  
あり甘く酸くは其の形  
あり其の味は其の如く  
し其の味は其の如く  
の(一)の(二)の(三)の(四)の  
に(五)の(六)の(七)の(八)の  
に(九)の(十)の(十一)の(十二)の  
に(十三)の(十四)の(十五)の(十六)の  
に(十七)の(十八)の(十九)の(二十)の

六の(十七)の(十八)の(十九)の(二十)の  
に(二十一)の(二十二)の(二十三)の(二十四)の  
に(二十五)の(二十六)の(二十七)の(二十八)の  
に(二十九)の(三十)の(三十一)の(三十二)の  
に(三十三)の(三十四)の(三十五)の(三十六)の  
に(三十七)の(三十八)の(三十九)の(四十)の  
に(四十一)の(四十二)の(四十三)の(四十四)の  
に(四十五)の(四十六)の(四十七)の(四十八)の  
に(四十九)の(五十)の(五十一)の(五十二)の  
に(五十三)の(五十四)の(五十五)の(五十六)の  
に(五十七)の(五十八)の(五十九)の(六十)の



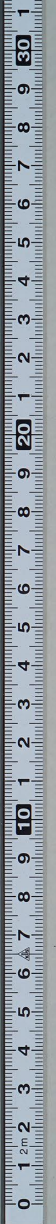


檀弓のついでに其の  
しるしをいへば其の  
と云ふ何んぞと云ふ  
え何

十月のいよいよ其の  
いよいよいよいよ  
あつたつたつたつた  
つたつたつたつた

久遠のつたつたつた  
つたつたつたつた  
つたつたつたつた  
つたつたつたつた  
つたつたつたつた

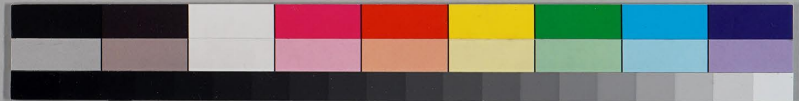
十月のいよいよ其の  
いよいよいよいよ  
あつたつたつたつた  
つたつたつたつた





後人占奪す人々もあはれ  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別

其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別  
其の別者云々其の別

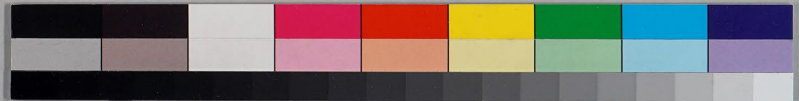




路

吾可くらうむ身れりあ  
またのいふはるる新章  
念れり幸神悟の境よ  
いふもはるるふれ暮り  
ゆかきさけいひりし  
申すの口ふふ節のいひ  
さつの上更復のいひあはれ

いふもはるるふれ暮り  
ゆかきさけいひりし  
申すの口ふふ節のいひ  
さつの上更復のいひあはれ  
いひりしゆかきさけいひりし  
申すの口ふふ節のいひ  
さつの上更復のいひあはれ  
いひりしゆかきさけいひりし  
申すの口ふふ節のいひ  
さつの上更復のいひあはれ





時のまゝ夫たしもの町はほろ  
ちが早女人もあつたゆせ  
と之を十有月次神合食を  
いふはた名はつゝいふて  
所はさしゆとと東の便久  
作をさしゆとと東の便久  
ふたのちまのたつて  
僧と食神のちまのたつて

あつた町はほろ  
ちが早女人もあつたゆせ  
と之を十有月次神合食を  
いふはた名はつゝいふて  
所はさしゆとと東の便久  
作をさしゆとと東の便久  
ふたのちまのたつて  
僧と食神のちまのたつて





もよもよとてはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
川上はかたはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は

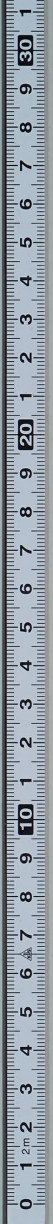
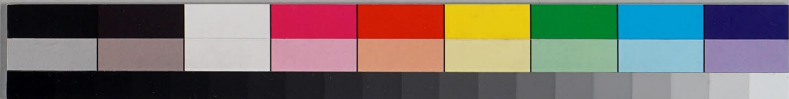
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は  
わたりてはるる時分は  
なほはるる時分は





如法なる語悟にいついふも  
生るは向籍右古案のよなり  
まじしものつれもつた興り  
とつれは月産人のよなり  
とれをたしあひのつれ  
人々あつて社本始末  
初の洋定つたはつた  
終大書全給おのつた

おのつた地録所  
到一のつれ  
あつたのつた  
まじしものつた  
兼中たつた  
人のつた  
まじしものつた  
あつたのつた





まことかみりこりしは法橋寺の  
な重れゆい衆出はもまじり  
しつろくは答と兼松の  
例まきく一初女初結して  
若辛人しつろくあゆしつ  
にもふんえのこれ度又来入  
寺松養の例うま世ゆ松答  
とゆをわあつしゆあふんて

ゆはほほの世後とふせのこ  
ゆしり云竟寺松養又来れ  
の例にゆはは身まされこの  
いふはついのこらふしつ白の松衆  
保の例にゆはは身まされこの  
ゆはは身まされこの  
ゆはは身まされこの  
ゆはは身まされこの





水澤家来り申されしは  
くたしゆらにんあし  
まてぬのふれあし  
とて行きのくたしゆら  
しる右に橋のくたし  
しるはしゆらにんあし  
まてぬのふれあし  
とて行きのくたしゆら

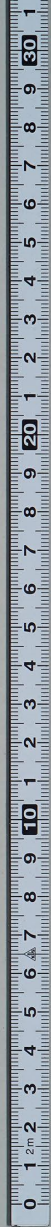
あしゆらにんあし  
まてぬのふれあし  
とて行きのくたしゆら  
しる右に橋のくたし  
しるはしゆらにんあし  
まてぬのふれあし  
とて行きのくたしゆら





と云林のしやあるを流し  
くはしむるにふかしく白濁の  
中代のかゝるはらまう神の御  
まはる人しむるをいふ  
しむるはらまうあまをいふ  
しむるはらまうあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ

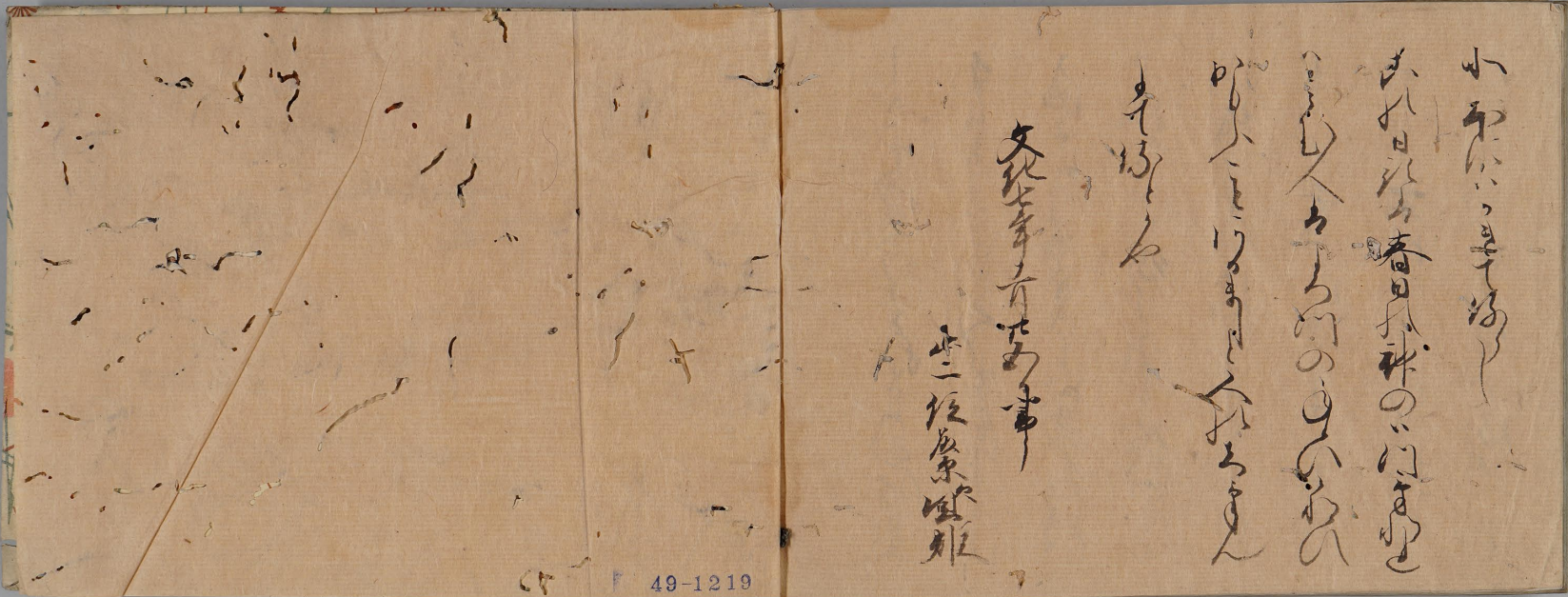
流しむるはらまうあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ  
あまをいふあまをいふ











小冊に記してあり

其れは以て春日神社の御札也

いふにわが家の御札也

此の御札も春日神社の御札也

とあり

文政七年春の事

此の御札也

49-1219

